

# VIII. 大陸浪人と文士 (1)

## VIII-1 大日本帝国憲法、その後

…人民ノ議論ハ人民ノ精神ノ発スル所ナリ。…然カモ亦決シテ滅尽スベカラザルモノナリ、決シテ破壊スベカラザルモノナリ。国家滅亡スト雖モ喪失スルコトナキモノナリ、山河傾頽スト雖モ變動スルコトナキモノナリ。故ニ政府ノ法制ハ纔(わず)カニ之ガ護衛ヲ為スノ具タル耳(のみ)。…

…国家アレバ則憲法ヲ立テ、以テ之ヲ保全ス可ク、国家ナケレバ則天然ノ智カト体カニ依テ之ヲ保護スベク、曾テ之ヲ忽(ゆるがせ)ニス可カラザル也。

植木『言論自由論』愛国社(舎)、一八八〇年五月二七日、『植木枝盛集』第一巻、七二～三、五頁。

- 憲法が發布され、近代国家の形を整えつつあった日本。だが、人間存在は、憲法の幅にはけっしておさまっていない。自由は、暴力と、孤独と、死とに真面目にむきあうときにはじめて自由となる。真の自由は、憲法の外にある。
- ひとつは国家の外部に。こちらは大陸浪人たちがこれを代表するだろう。
- もうひとつは、精神の世界。《純文学》が、憲法制定とともに終わりを迎えた自由民権運動の鬼子として、産声をあげる。法外な場所(アジール)としての、精神。

## VIII-2 北村透谷

旧小田原藩の没落士族に生まれる。自由民権運動に身を投じるも、大井憲太郎率いる朝鮮内政改革運動(大阪事件)に加わるも、活動資金を得るための銀行強盗に絶望して運動を離れ、数寄屋橋教会で洗礼を受けたのち、文学者の道へ。

- ◎ 研究者は彼を政治活動に挫折したロマン主義文学者と規定して事足りりとしている。
- ◎ あまたの外来文化のひとつであるキリスト教の影響を受けた人物として評価。
- ◎ 「恋愛は人世の秘鑰(ひやく)なり」(「厭世詩家と女性」1892)。島崎藤村を震撼させる。

## VIII-3 透谷の思想

### 【透谷の言語観】

唯だ夫れこの心の世界斯の如く広く、斯の如く大に、森羅万象を包みて余すことなく、而してこの広大なる心が来り臨みて人間の中にある時に、渺々たる人間眼を以て説明し得べからざるものを世に存在せしむるなり。

…人間の中に存在する心は至大至重のものにして、俗眼大小の以て衡すべきにあらず、学問律法の以て度測すべきものにあらず、小善小仁の以て論ずべきにあらざるを示せしに外ならず。

「各人心宮内の秘宮」1892

- ◎ 精神の世界は世俗の世界(学問律法)より大きい。

各人は自ら己れの生涯を説明せんとて、行為言動を示すものなり、…人には各自に何事かの秘密あるものなり、…人須らく心の奥の秘宮を重んずべし、之を照らかにすべし、之を直うすべし、之を白からしむべし、之を公けならしむべし。

同前

- ◎ 「心の奥の秘宮」「秘密」は隠されているではない。

万物自から声あり。万物自から声あれば自から又た楽調あり…何事も何かの声なるべし、何かの声にては分らず何の声ぞと根問ひするはうるさき我友なり。何かの声にて分らねばわからぬにて好し、われはこの何かの声をたのしむこと限りなきものなり。

「幽境の逍遙」1893

文章は筆官の製作とのみ思ふべからず、天地はそのまゝにて一大文章なり。

「電影草盧淡話」1893

- ◎ 世界はすでに言葉の世界。書物を境にして、一方に世俗の客観的世界が、他方に精神にもとづく主観的世界が形成されているのではない。したがって……

文章即ち事業なり。

「人生に相渉るとは何の謂ぞ」1893

- ◎ 精神＝言葉は、媒介なしに、出来事である。だから……

文芸上にて理想派の謂ふところのものは、人間の内部の生命を観察するの途に於て、<sup>リアリチー</sup>極致を事 実の上に具体の形となすものなり。絶対的にアイデアなるものを研究するは形而上学の唯心論なれども、そのアイデアを<sup>リアリチー</sup>事 実の上に加ふるものは文芸上の理想派なり。ゆえに文芸上にては殆どアイデアと称すべきものはあらざるなり…

「内部生命論」1893

- ◎ 透谷は文学上のロマン主義とリアリズムとを区別しない。精神を描くことも、肉体を描くことと同様に、すべてリアリズム。

→ あらためて、憲法について考えてみよう。憲法はいかにして現実化するのだろうか？

天下に極めて無言なる者あり、山岳之なり、然れども彼は絶大の雄弁家なり、<sup>も</sup>若し言の有無を以て弁の有無を争は<sup>すべ</sup>ざ、凡ての自然は極めて<sup>あは</sup>憫れむべき<sup>あじ</sup>唾児なるべし。然れども常に無言にして常に雄弁なるは、自然に加ふるものなきなり。

「人生に相渉るとは何の謂ぞ」

#### VIII-4 文士の戦いと純文学

##### 【文士の概念】

繊巧細弱なる文学は端なく江湖の嫌厭を招きて、<sup>あや</sup>異しきまでに反動の勢力を現はし来りぬ。愛山生が徳川時代の文豪の遺風を襲ひて、「史論」と名くる鉄槌を<sup>なづ</sup>揮ふ<sup>ふる</sup>ことになりたるも、其の一現象と見るべし。民友社をして愛山生を起たしめたるも、江湖をして愛山生を迎へしめたるも、この反動の勢力の<sup>うつぼつ</sup>鬱悖したる余りなるべし。

反動は愛山生を載せて走れり。而して今や愛山生は反動を載せて走らんとす。彼は「史論」と名くる鉄槌を以て撃砕すべき目的を<sup>しき</sup>拡めて、頻りに純文学の領地を襲はんとす。反動をして反動の勢を<sup>ほしいまゝ</sup>縦にせしむるは余も異存なし、唯だ反動を載せて、他の反動を起さしむるまで遠く走らんとするを見る時に、反動より反動に漂ふの運命を我が文学に与ふるを悲しまざる能はず。愛山生は、文章即ち事業なる事を認めて、「頼襄論」の冒頭に宣言せり。何が故に事業なりや。愛山生は之を解いて曰く、第一 為す所あるが為なり。第二 世を益するが故なり。第三 人世に相渉るが故なりと。

而して彼は又た文章の事業たるを得ざる条件を挙げて曰く、第一 <sup>くう</sup>空を撃つ剣の如きもの。第二 空の空なるもの。第三

華辞妙文の人生に相渉らざるもの。而して彼は此冒頭を結びて曰く「文章は事業なるが故に崇<sup>あがむ</sup>べし、吾人が頼<sup>たの</sup>を論ずる、即ち渠<sup>かれ</sup>の事業を論ずるなり」と。

「人生に相渉るとは何の謂ぞ」

◎ 山路愛山との論争のなかで、のちに展開をみる「純文学」「文士」の概念が明確化。

Cf. 山路愛山「頼<sup>たの</sup>を論ず」

文章即ち事業なり。文士筆を揮ふるふ猶英雄剣を揮ふが如し。共に空を撃つがために非ず為す所あるが為也。万の弾丸、千の剣芒<sup>さ</sup>、若し世を益せずんば空の空なるのみ。華麗の辞、美妙の文、幾百巻を遺して天地間に止るも、人生に相渉ら<sup>あひわた</sup>ずんば是も亦空の空なるのみ。文章は事業なるが故に崇<sup>あがむ</sup>べし、吾人が頼<sup>たの</sup>を論ずる即ち渠<sup>かれ</sup>の事業を論ずる也。

吾人は記憶す、人間は戦ふ為に生れたるを。戦ふは戦ふ為に戦ふにあらずして、戦ふべきものあるが故に戦ふものなるを。戦ふに剣を以てするあり、筆を以てするあり、戦ふ時は必ず敵を認めて戦ふなり、筆を以てすると剣を以てすると、戦ふに於ては相異なるところなし、然れども敵とするもの、種類によつて、戦ふもの、戦を異にするは其当なり。戦ふもの、戦の異なるによつて、勝利の趣も亦た異ならざるを得ず。戦士陣に臨みて敵に勝ち、凱歌を唱へて家に帰る時、朋友は祝して勝利と言ひ、批評家は評して事業といふ、事業は尊ぶべし、勝利は尊ぶべし、然れども高大なる戦士は、斯の如く勝利を携へて帰らざる事あるなり、彼の一生は勝利を目的として戦はず、別に大に企図するところあり、空を撃ち虚を狙ひ、空の空なる事業をなして、戦争の中途に何れへか去ることを常とするものあるなり。

「人生に相渉るとは何の謂ぞ」

◎ 丸山真男「日本の思想」

文学者が（鷗外のような例は別として）官僚制の階梯からの脱落者または直接的環境（家と郷土）からの遁走者であるか、さもなくば、政治運動への挫折感を補完するために文学に入ったものが少なくなく、いずれにしても日本帝国の「正常」な臣民ルートからはずれた「余計者」的存在として自他ともに認めていたこと一などの事情によって、制度的近代化と縁がうすくなり、それだけに意識的な立場を超えて「伝統的」な心情なり、美感なりに著しく傾斜せざるをえなかった。

斯の如き戦は、文士の好んで戦ふところのものなり。斯の如き文士は斯の如き戦に運命を委<sup>ゆた</sup>ねてあるなり。文士の前にある戦場は、一局部の原野にあらず、広大なる原野なり、彼は事業を齎<sup>もた</sup>らし帰らんとして戦場に赴かず、必死を期し、原頭の露となるを覚悟して家を出るなり。斯の如き戦場に出で、斯の如き戦争を為すは、文士をして兵馬の英雄に異ならしむる所以にして、事業の結果に於て、大に相異なりたる現象を表はすも之を以てなり。

源頼朝は能く撃てり、然れども其の撃ちたるところは速かに去れり、彼は一個の大戦士なれども、彼の戦場は実に限ある戦場にありし、西行も能く撃てり、シエクスピーアも能く撃てり、ウオーツォルスも能く撃てり、曲亭馬琴も能く撃てり、是等の諸輩も大戦士なり、而して前者と相異なる所以は前者の如く直接の敵を目掛けて限ある戦場に戦はず、換言すれば天地の限なきミステリーを目掛けて撃ちたるが故に、愛山生には空の空を撃ちたりと言はれんも、空の空の空を撃ちて、星にまで達せんとせしにあるのみ。行いて頼朝の墓を鎌倉山に開きて見よ、彼が言はんと欲するところ何事ぞ。来りて西行の姿を「山家集」の上に見よ。孰<sup>いづ</sup>れか能く言ひ、孰<sup>いづ</sup>れか能く言はざる。

造化主は吾人に許すに意志の自由を以てす。現象世界に於て煩悶苦戦する間に、吾人は造化主の吾人に与へたる大活機を利用し

て、猛虎の牙を弱め、<sup>たうがい</sup>倒崖の根を堅うすることを得るなり。現象以外に超立して、最後の理想に到着するの道、吾人の前に開けてあり。大自在の風雅を伝道するは、此の大活機を伝道するなり、何ぞ英雄剣を揮ふと言はむ。何ぞ為すところあるが為と言はむ。何ぞ人世に相渉らざる可からずと言はむ。<sup>くう</sup>空の空の空を撃つて、星にまで達することを期すべし、俗世をして俗世の笑ふまゝに笑はしむべし、俗世を済度するは俗世に喜ばるゝが為ならず、肉の剣はいかほどに鋭くもあれ、肉を以て肉を撃たんは文士が最後の戦場にあらざり、眼を挙げて大、大、大の虚界を視よ、彼処に登攀して清涼宮を捕握せよ、清涼宮を捕握したらば携へ帰りて、俗界の衆生に其一滴の水を飲ましめよ、<sup>い</sup>彼等は活きむ、<sup>あゝ</sup>嗚呼、<sup>あゝ</sup>彼等庶幾こひねがはくは活きんか。

彼の物質的論家の如きは、世界を狭小なる家屋となして、其家屋の内部を整頓するの外には一世の能事なしとし、甘じて愛に起臥せんとす…。靈性的の道念に逍遙するものは、世界を世界大の物と認むることを知る、而して世界大の世界を以て、甘心自足すべき住宅とは認めざるなり、世界大の世界を離れて、<sup>リアリティ</sup>大大大の<sup>い</sup>実在を現象世界以外に求むるにあらざらば、止まざるなり。

「人生に相渉るとは何の謂ぞ」

### 【純文学】

徳川氏の時代にあつて、最も人間の生命に近かりしものは儒教道徳なりしこと、何人も之を疑はざるべし。然れども儒教道徳は實際的道徳にして、未だ以て全く人間の生命を教へ尽したるものとは言ふべからず。繁雑なる礼法を設け、種々なる儀式を備ふるも、到底 Formality に陥るを免かれざりしなり、到底貴族的に流るゝを免かれざりしなり、之を要するに其の教ふる処が、人間の根本の生命の絃に触れざりければなり。

「内部生命論」

- ◎ 精神には二段階ある。俗世とかかわる形式的・観念的な精神と、生命をもった精神。生命？

文芸は論議にあらざること、幾度言ふとも同じ事なり。論議の範囲に於て、根本の生命を伝へんとするは、論議の筆を握れる者の任なり、文芸（純文学と言ふも宜し）の範囲に於て、根本の生命を伝へんとするは、文芸に従事するものゝ任なり。純文学は論議をせず、故に純文学なるもの無し、と言はゞ誰か其の極端なるを笑はざらんや。論議の範囲に於て、善悪を説くは、正面に之を談ずるなり。文芸の範囲に於て善悪を説くは、<sup>りめん</sup>裡面りめんより之を談ずるなり。

「内部生命論」

- ◎ 議論＝俗世における戦闘は純文学のなすところではない。むしろ誰もが有し、また主観ならざる精神内の生命を描写することこそ、純文学の仕事。文士はこの精神内の生命を射止めるために戦う。

詩人哲学者は到底人間の内部の生命を<sup>ソルグ</sup>解釈するものたるに外ならざるなり、而して人間の内部の生命なるものは、吾人之れを如何に考ふるとも、人間の自造的のものならざること信ぜずばあらざるなり、人間のヒューマニチー即ち人性人情なるものが、他の動物の固有性と異なる所以の源は、即ち愛こゝに存するものなるを信ぜずばあらざるなり。生命！ 此語の中にいかに深奥なる意味を含むよ。宗教の泉源は愛にあり、之なくして教あるはなし、之なくして道あるはなし。之なくして法あるはなし。真理！ 世上所謂真理なるもの、果して何事かを意味する。ソクラテスも靈魂不朽を説かざれば、一個の功利論家を出る能はざるなり、孔子も道は<sup>ちか</sup>遷きにありと説かざれば、一個の藪医者たるに過ぎざりしなり。道は遷きにありと言ひたるもの、即ち、人間の<sup>ひあう</sup>秘奥の心宮を認めたるものなり。靈魂不朽を説きたるもの、即ち生命の泉源は人間の自造的にあらざるを認めたるものなり。内部の生命あらずして、天下豈、人性人情なる者あらんや。インスピレーションを信ずるものにあらずして、真正の人性人情を知るものあらんや。

「内部生命論」

- ☺ 内部の生命は、人間の主観とは独立したもの。内的かつ客観的な生命。いかにここに触れるか？
- ☺ 恋愛に人生の鍵を認めた透谷の意図を考えあわせてみよう。

## VIII-5 平和主義へ

### 【透谷の平和】

平和の文字甚だ新なり、基督教以外には更に斬新なり。

『『平和』発行之辞』1892

- ☺ 中江兆民の「小邦非武装」論とも、植木枝盛の「万国共議政府」とも異なる。
- ☺ 国家を前提した国際協調主義とは異なる、もっとアナーキーな（個人的な・内部生命的な）もの。ミクロな戦闘的平和主義。
- ☺ 日本平和会を結成。雑誌『平和』を刊行。日清戦争を批判。

Cf. 島崎藤村「北村透谷の短き一生」1912

北村君は大変声の涼しいような人で、私は北村君の事を思い出す度に、種々な書いたものを読んで聞かせたり、その時々  
に話したりした声が、今だに耳についているような気がする。晩年には服装なりなぞも余り構わなかったし、身体どちらは何方か  
と云えば痩せぎすな、少し肩の怒った人で、髪なぞは長くしていた。北村君の容貌の中で一番忘れられないのは、その  
さもパッションに燃えているような、そして又考え深い眼であった。

明治年代に記憶すべき、大きな出来事の一つは、士族の階級の滅亡である。その階級もが有すべて凡てのもの滅びて行  
ったことである。その士族の子孫の中から北村君のような物を考える人が生れて来たということは私には偶然では無い  
ように思われる。猶なお、新時代の先駆者たりし北村君に就いては、話したいと思うことは多くあるが、ここにはその短い  
生涯いちべつの一瞥にとどめておく。